

多摩地域史研究会会報

第162号

2024(令和6)年9月20日発行

事務局：〒207-0063 東京都千代田区千代田1-10-1 龍泉寺

Tel 03-5497-0003 E-mail.tamatiken@yahoo.co.jp

Fax : 045-663-2295 (ホームページ現在休止中)

【第120回例会報告】

今回の例会は、8月3日(土)猛暑の中、立川市たましん RISURU ホール第2会議室で行なわれました。参加者は、講師の小川望さん、寺前めぐみさんのほか19名でした。

詳しい内容は次頁以降を見ていただき、ここではお二人のご発表の成果と問題点を述べておきます。

発表1の小川さんは、小平市の鈴木遺跡の概要から始まり、そして市域を流れる玉川上水分水について概略を述べられました。そのいくつかの分水の中で、今回のご発表の中心は、鈴木新田南側田用水とその用水を利用した水田でした。

小川さんは、発掘調査によって溝状の遺構を発見しました。その溝は現地表面上では見えなかった埋没谷を通っていました。また調査区の外縁にある土層を観察するための断面をみると、水田層と思われる土層を発見しました。そして小川さんは、これは何かと考え、過去の文献や史料を検索したのでしょう。そのことは今回のレジュメを見れば明らかです。こうして考古資料と過去の文献や史料を合わせて考察し結論を出したのです。

つまり地域史の方法として、地域という限られた範囲の中では、当然史・資料に偏在がみられます。ほとんどの地域は、少ないと言っていいでしょう。その少ない史・資料、その他をどのように組み合わせて地域史を構築するか、小川さんのご発表はその好例と言っていいと思います。

また、本来水田のできにくい台地の上になぜ水田を作ったのか、その水田が天保の飢饉が終わりかけた天保8年(1837)に作られたことは、飢饉と関係があるのかなど、多くの問題を含んでいると思います。

発表2の寺前さんのご発表は、国分寺市内の玉川上水分水を概観したうえで、発掘調査が実施された恋ヶ窪村分水跡、中藤新田分水跡と榎戸水車の調査報告を述べられました。

この中で最も不思議に思ったことが、「慶應3年(1867)、南野中新田分水の取水口が西側の砂川一番天王橋付近へ移動したことに伴い、中藤新田分水より深く掘り下げた水路が交差したため、水が中藤新田に流れなくなる騒動が起こった。これに焦心苦慮した中藤・平兵衛新田は奔走する。中藤伸彌家文書によると、翌4年(1868)8~10月に「是迄之堀敷」より深さ六尺(約1.8m)の位置で巾三尺(約90cm)、内法三尺の『胎内堀』を225間(約409m)分掘削することにした」というところです。

「胎内堀」を掘削するという技術も驚きですが、それよりも交差する用水については、当時既に「掛け樋」、「くぐり樋」という技術もあったのですから、なぜそれを用いなかったことが不思議です。

もしかしたら南野中新田分水の取水口が上流へ移動したのは、玉川上水が下刻し水位が下がったためとすれば、中藤新田分水や平兵衛新田分水の取水口も下げる必要が生じ、そのため「胎内堀」を掘らざるを得なかったとは考えられないでしょうか。

このほかにも様々な問題点があると思いますが、紙数の関係もありここまでにします。ともかく上記の二分水は、市重要史跡として記録保存も含めて保存されています。今後はその他の分水など、どのように保存・整備されていくのか、見守りたいと思います。

最後になりましたが、今回の発表を快くご承諾いただいたお二方に感謝申し上げます。(梶原 勝)